

## 戦略学序説

清水 龍 雄

### 論 旨

筆者は過去の会社員人生、経営コンサルタント人生に引き続いて、現在は経営戦略論を専攻する教員である。これらの期間を通じて、数十年にわたって経営戦略の実務と理論に関与し続けて来た事になる。経営戦略をより良く理解する為には、戦略の一般理論を学ぶ事が正道であると感じ、先学の知見を求めたが、意外にもそれは貧弱であった。そこで遂に筆者自身がこの一種のメタ戦略理論を構築せざるを得ないと決心し、ここ数年間鋭意研究を進めて来た。筆者が構想するメタ戦略理論体系を、「戦略学 (Strategiology)」と仮称する。

- (1) 本稿は、筆者による戦略学論考である「戦略学序説」の第5回発表に相当する。なお、現在予定している「戦略学序説」の全体系を、序章において仮目次の形で発表した。
- (2) 第1章～第4章の詳細な研究成果については、すでに「豊橋短期大学紀要」および「豊橋創造大学紀要」の各号に発表済みである。
- (3) 本稿では、日本戦略思想史の前史部分である第5章について、筆者の最近の研究成果を詳細に発表している。時代区分としては、古代から中世までを扱っている。これらの時代区分において、戦略思想史という角度からの知見は、予想に違わず乏しかったので、既存の考古学や歴史学の知見に、筆者独自の見方を付加してまとめ上げたものである。

### 序 論

筆者はこれまでの職業人生として、会社員人生、経営コンサルタント人生に引き続き、現在は学部教員という第3の人生を送っている。社会に出てから40余年の、それなりに多彩ともいえる職業人生の中でも、経営戦略の実務と理論の探究は、筆者のメインテーマであり続けて来た。大学専任教員となつてからは特に、経営戦略をより良く理解するためには、戦略の一般理論を学ぶべきだと思い、先学の知見を求めたが、意外にもそれは乏しかったのである。

そこで今や筆者自身がこの「メタ戦略理論」の構築に取り組む外にないと決心するに至った。ここ数年間にわたって、鋭意研究を推進した結果、次に示す通りの目次案では、内容的にその3分の1程度までの進捗を獲得した。今後共筆者のライフワークとして、引続き研究を進めて行く所存である。

筆者の構想する「戦略学( Strategiology )」の骨格を、次の通り仮目次の形で体系的に示す。

第1章 戦略入門		第8章 日本の戦略思想史 その4(現代)
第2章 欧米戦略思想史	その1(古代・中世)	第9章 東洋の戦略思想史
第3章 同	その2(近代)	第10章 ストラテジー学の成立
第4章 同	その3(現代)	第11章 人間と戦略
第5章 日本の戦略思想史	その1(前史)	第12章 経営と戦略
第6章 同	その2(近世)	第13章 国家と戦略
第7章 同	その3(近代)	第14章 ストラテジー学の課題

このうち

第1章は戦略学全体系への序論であり、戦略問題の理論化への入門篇である。

社会科学としての戦略学が理論・歴史・政策の3部門から構成されるべきものとすれば、<sup>0-01)</sup>第2章～第9章は、歴史部門として古今東西の戦略思想を歴史的に研究した部分である。

第10章は、ストラテジー学(戦略学)の抽象理論の成立を論ずる。

第11章～第13章は、一般戦略理論の政策部門に相当する、応用各分野別の研究である。

第14章は、今後の研究課題について述べる。

## 第1章 戦略入門

戦略一般理論の必要性から説き起こし、戦略の定義、戦略と方針、戦略学のパラダイムなどに説き及んでいる。本章の研究成果の詳細は、拙稿「ストラテジー学」<sup>1-01)</sup>その他の論考に発表済みである。

## 第2章 欧米戦略思想史 その1(古代～近世)

欧米戦略思想史における前史部分に相当

する古代から、フリードリッヒ大王(プロイセン)やナポレオンの時代までを対象として研究した。本章における研究内容の詳細は、拙稿「戦略学序説」<sup>2-01)</sup>などを参照されたい。

## 第3章 欧米戦略思想史 その2(近代)

ドイツ参謀本部や、クラウゼヴィッツの戦略思想などを研究の柱としている。本章の研究内容の詳細に関しては、拙稿「戦略学序説」<sup>3-01)</sup>を参照されたい。

0-01) 裴富吉 1993,『経営学講義』白桃書房:17.

1-01) 清水龍雄 1997,「ストラテジー学」,『豊橋創造大学紀要』1:46-53.

2-01) 清水龍雄 1996,「戦略学序説」,『豊橋短期大学紀要』13:87-97.

3-01) 清水龍雄 1998,「戦略学序説」,『豊橋創造大学紀要』2:76-88.

## 第4章 欧米戦略思想史 その3（現代）

20世紀の戦争は、何ととっても総力戦であった事がその特徴である。20世紀という時代区分そのものが、「戦争の世紀」と呼ぶにふさわしい激動の時代であった。本章の研究内容は、拙著『戦略と経営』<sup>4-01)</sup>：第2部7(章)に大幅加筆して、拙稿「戦略学序説」<sup>4-02)</sup>として発表済みである

## 第5章 日本の戦略思想史 その1（日本戦略思想前史）

### 5.1 はじめに

#### 5.1.1 本章の位置づけ

第5章～第8章を、わが国の戦略思想史研究に充てる。うち本第5章は、わが国の戦略思想前史として、古代から中世までの期間を取り扱う。

いかに前史とはいえ、何も古代まで遡る事もあるまいという御批判も有り得るとは思うが、ここでは谷沢永一（関西大学名誉教授）の史観を紹介する事で、筆者の論拠に代えたい。

それは、日本歴史が太古以来、昭和49年（1974）までが第1期で、それ以降を第2期の日本歴史とすべきだとする主張である。第1期は先進国に追いつき追い越せの連続であった。この努力目標が史上はじめて消え去ったのが、昭和49年であったというの

である。その1例としては、この年にわが国の鉄鋼業の技術貿易は、はじめて出超に転じたのである。<sup>5.1-01)</sup>

#### 5.1.2 日本人に戦略思想はあるのか？

わが国では、例えば先般の大東亜戦争に至るまでの国策の失敗や、戦時中の軍事上の失敗の数々をとりあげ、また戦前・戦後の国際情勢の変化に対応する政策の無定見などにちなんで、そもそも日本人には戦略思考などは向いていないのだというような、悲観的な論評がある。

それに反してというか、いやそれ故にというか、産業界では経営者達やビジネスマン達の間で戦史や戦略への関心の高まりは根強く続いている。某経営雑誌のごときは、「〇〇の戦略」を毎月の特集として継続するという戦略(?)を採用した結果、発行部数の大幅増に成功しているという。

伊藤憲一（青山学院大学教授）によれば、日本人は対内国家戦略の策定に限っては、仲々に巧みである。国民の同質性が高くておおむね単一民族で構成されている上に、「根回し」などという手法を体得しているからである。この対内戦略手法は徳川鎖国時代を通じて成熟したのであるが、その同じ時期に對外戦略能力の方は退化し続けた。真の意味の戦略論はこの對外戦略論なのであり、対内戦略論の方はむしろ組織論なのである。<sup>5.1-02)</sup> この点は、筆者もほとんど賛成ではあるが、果たしてそれは日本人の国民性とまでいえるのであろうか。

4-01) 清水龍雄 1991, 『戦略と経営』清水経営研究所。

4-02) 清水龍雄 1999, 「戦略学序説」『豊橋創造大学紀要』3。

5.1-01) 谷沢永一 1992, 『先見力の達人 長谷川慶太郎』学研：135。

5.1-02) 伊藤憲一 1985, 『国家と戦略』中央公論社：序論i。

一方、田岡俊次(朝日新聞編集委員)にいわせれば、「阿片戦争の時期から、日本は西欧列強の植民地となる危険を感じざるを得ず、防衛を懸命に考え、日露戦争に勝って一安心するまでは真剣だった。軍事問題の論議も活発で、おおむね実務的だった。日露戦争中でも新聞は、精密な戦略の評論を出している」。<sup>5.1-03)</sup>

ところが日露戦争は、世界の戦争史上における珍事といわれるほど日本の圧勝に終わった為に、国民はすっかり安心してしまい、以後戦争の事は軍人に任せておけばよいという気分になり、軍人自身も自信満々になっていった。「一般国民に十分な軍事常識があれば、満州事変から日華事変、第二次大戦に至る愚劣な戦争をせずに済んだかもしれない。戦後50余年を経て、戦争責任は少数の軍人が悪人だったからといって済ませられるものではない。全国民的な驕りがあったという事であろう。

第2次大戦以降に全く戦争をしていない国は、世界中で10ヵ国程度しかない。スウェーデン、ノルウェーなどのスカンジナビア諸国やスイスなどと並んで、日本は世界でも珍しい国の部類に入っている。「幸いにも日本が半世紀戦争に巻き込まれず、世界最大の債権国の地位に立ち得たのは、これまた望外の大勝かもしれない。だが自国の安全な環境と繁栄にひたり……軍事問題に全く無関心であるのも、これまた恵まれた国に生きる事から来る一つの驕りではなからうか」。<sup>5.1-04)</sup>

ここにおいて、戦争を知らない若者達をも含めて、日本国民は戦争責任を免れる事はできないという事が明白となった。我々の研究テーマに即していえば、日本人の国民性として戦略思考が欠けていると断言する事も、また無責任というべきではなからうか。そこで、この大問題を考え続けつつ、以下の論述を進めて行く事としたい。

## 5.2 神話時代における戦略思想の検証

### 5.2.0 神話の「非神話化」について

本節においては、古代における戦略思想を日本神話の中にまで踏み込んで検証しようとする。これは果して、余りにもリスクな試みであろうか。かつて山本七平(作家・評論家)が西郷信綱(横浜市立大学教授)と対談し、神話の「非神話化」について語っている事柄は、筆者を勇気づけるのである。山本はいう。神話はどンドン「非神話化」して行き、後代になると遂に単なる一つの「表現」となるに至る。何かを叙述する手段として、神話を使う。その好例が黙示文学である。例えば新約聖書における「ヨハネ黙示録」<sup>5.2-01)</sup>のように、神話的材料や描写を、何かの象徴として使う。後代になると、もはやそれらが直接に何を指しているのかわからないという事になる。

「明治以降、戦前までの日本では、神話が事実として教えられていたかという、決してそうじゃなかったと思いますね。むしろこの黙示文学に近いものとして受け取られていたんじゃないか。そして、そういう

5.1-03) 田岡俊次 1994、『戦略の条件』悠飛社：55ff.

5.1-04) [田岡俊次, 1994]: 53.

5.2-01) 日本聖書協会 1995、『新約聖書 新共同訳』: 452ff.

神話に対する要求は、案外現在まで変わらずに続いていると思うのですよ」<sup>5.2-02)</sup> 筆者には、もしかすると、戦後民主主義も神話かと思われなくてもいいのである。

ともあれ、上記の山本発言は直接には、高天原(たかまがはら)から一転して根の国に追放されたスサノオを話題にしているのであるが、西郷はこれに対して次のように応じた。

「いわゆる合理主義に対する信頼が崩れ、人間がもう一度神話的な混沌に差し戻されてしまった。比喩的には、われわれ一人一人が、暗い根の国に追放されたともいえる。そういう意味では、スサノオはわれわれの運命に似ていなくもない。しかし根の国は、単に暗いだけではなく、豊饒の源でもあり、そこで生まれ変わりが演じられたという事も忘れてはならないと思います。」

## 5.2.1 神武東遷の戦略

### (1) 始祖大王神話

『天皇紀』の初代に相当する神武(じんむ)は実在せず、神話上の人物だとするのが、古代史学の定説である。<sup>5.2-03)</sup> しかし神武の名によって代表されるような一大勢力が、筑紫の日向から長駆東進し、遂に大和に入ったという事は確かであろう。

ついで、実質上の初代大王かもしれない応神(おうじん)の場合を見てみよう。応神は神功(じんぐう)皇后が新羅(しらぎ)征伐の後に、筑紫で生んだ事になっており、応神も最終的に大和に入っている。

両者を通じて、当時認識されていた日本全体を股にかけた戦略行動が表現されているものといえよう。

### (2) 高天原神話

イザナギ(男神)とイザナミ(女神)が高天原(天上)で交わった結果、国(地面)が生まれたという神話である。イザナミは死んで地下にある黄泉(よみ)の国に下ったので、イザナギは彼女を追って黄泉の国へ入って行った。彼はそこで、「膿わき蛆たかる」状態での妻の遺体に出会った。そして「けがれ」を受けたため、筑紫の櫛原(あわきはら)で「みそぎ」をした。神話はここでも、ヤマト政権が九州から来た事を指し示している。上記の遺体が腐敗して行く状態は、森浩一(同志社大学教授)などが説明するように、古墳時代も後半の6世紀以降、従来の竪穴式石室に代って横穴式石室が流行し、遺体の変化に直面するようになった事態を反映していよう。<sup>5.2-04)</sup>

### (3) 天孫降臨神話

神武の曾祖父にあたるニニギノミコトが天から地上に降りて来たのは、筑紫の日向(ひむか;福岡県)の高千穂峰であり、俗説に出て来るような宮崎県ではない。しかし同じ九州の中であり、決して大和の天の香具山などではなかった。<sup>5.2-05)</sup>

神武は兄の五瀬(いつせ)命と協議し、「いかなる地(ところ)に坐(いま)さば、平(たいら)けく天の下の政(まつりごと)を

5.2-02) 西郷信綱・山本七平 1983,「高天の原を追われた荒ぶる神 スサノオの命」角川書店(編)『日本人の原像』(日本史探訪 1)角川文庫。

5.2-03) 黒岩重吾 1991,『古代史への旅』講談社文庫:32ffなど。

5.2-04) 森 浩一 1999,『日本神話の考古学』(朝日文庫)朝日新聞社:38-39。

5.2-05) 井上光貞 1993,『神話から歴史へ』(日本の歴史 1)中公文庫:86。

聞こしめさむ。なお東へ行かむと思う」といった。そして神武は多くの氏族を従えて九州を弑し、瀬戸内を経て畿内に至り、都を営んだのである。<sup>5.2-06)</sup> ここにも、いわゆるヤマト政権による全国統一という戦略目的が明示されている。

田中琢(奈良国立文化財研究所長)は、九州島に上陸した渡来人の系統に連なり、コメ作りの技術と弥生式土器をたずさえて九州島を再び発進した倭人が、本州島を東進しつつあるいは戦い、あるいは平和裡に混血していったと述べているのであるが、<sup>5.2-07)</sup> 筆者にはこの倭人集団の東進が、神話上の神武東遷として、人々の記憶の中に残されたのだと想定されるのである。

### 5.2.2 ヤマトタケル

神話上の人物の1人であるヤマトタケルは、古事記には「倭建命」として、また日本書紀には「日本武尊」として記されている。<sup>5.2-08)</sup>

ヤマトタケルは、第12代景行天皇の子、恐らくは次男と思われる(兄皇子がいる)。景行天皇は、大和の纏向(まきむく)〔奈良県桜井市)の日代(ひしろ)の宮で政務を執ったという。<sup>5.2-09)</sup> 古代史上での景行天皇の実像は必ずしも明確に比定できないが、4世紀より以前と見られている纏向遺跡に、ある種の都市機能が認められるとする説があ

る事を、<sup>5.2-10)</sup> 傍証の1つとしてここに記しておきたい。

さて「タケル」とは勇者を意味するが、神話のヤマトタケルはある1面ではやさ男であり、反面ではスサノオにも似たどう猛な「荒ぶる神」でもあった。これは、古代人の理想としての美と勇の兼備を示していよう。ヤマトタケルは父景行天皇から遠く西の九州にある熊襲(くまそ)征伐を命ぜられ、苦心の末女装してその首領熊曾建(くまそたける)に近づき、これを殺害した。もし現代のテレビドラマにでもすれば、主役のヤマトタケルにはビジュアル系歌手でも起用したいところであろう。

ヤマトタケルはその後各地の反対勢力を次々に平定し、最後には東方の蝦夷(えぞ)征伐を命ぜられる。東国征伐におけるエピソードとして、例えば焼津(静岡県)の草原で敵に四方から火をかけられた時は、彼は草那芸劔(くさなぎのたち)で草を切り払って危機を脱した。また相模の走水(横須賀市)から上総へ渡ろうとして暴風に会った時、後の弟橘比売命(おとたちばなひめのみこと)が海に飛び込んで海神をなだめたので、海が静まった。このように数々の苦難の末に、東国は平定されるのである。

ヤマトタケルの一生は、父天皇の為に東奔西走したのであるが、これら黙示文学的叙述の背景に、4~5世紀頃の古代大和政権

5.2-06) [井上光貞, 1993]: 249.

5.2-07) 田中 琢 1991, 『倭人争乱』(日本の歴史 )集英社: 67ff.

5.2-08) 上田正昭・益田勝美 1983, 「古代日本を平定した勇者 日本武尊」角川書店(編)『日本人の原像』(日本史探訪 1)角川文庫: 248.

5.2-09) 町田 章 1986, 「都市」『集落と祭祀』(岩波講座日本考古学 4)岩波書店, 山本忠尚 1998, 「飛鳥京の都市性を探る」田中琢・金関恕『都市と工業と流通』(古代史の論点 3)小学館などを参照した。

5.2-10) 井上光貞 1973, 『神話から歴史へ』(日本の歴史 1)中公文庫: 330.

がその版図拡大につとめ、西は現在の南九州から東は関東地方に至る広大な地域を獲得（又は共存）する戦略を実現し、その過程で複数の皇子将軍に率られた多数の軍勢が各地に派遣された事が読み取れるであろう。

ちなみに神話上のヤマトタケルは、多年にわたる戦陣の疲れから病みおとろえて伊勢まで帰って来て、郷里の大和を目前にして死んだ。そして彼の魂は白鳥に化身して天に舞い、しかし郷里には向かわず浜の方角へ飛び去るのである。益田勝美（法政大学教授）が、神話上のヤマトタケル白鳥化身の物語に、古代大和政権がその版図拡大のプロセスにおいて支払った「高価な犠牲」を見ているのには、筆者も同感である。<sup>5.2-11)</sup>

### 5.2.3 オオクニヌシ

神話上におけるオオクニヌシ（大国主命、大穴持命）は、出雲地方一帯をはじめとして、現在の鳥取県、兵庫県、北陸地方から長野県までを支配下におさめていた、まさに「大国の主」であった。

これに対し高天原のアマテラス（天照大神）は、葦原の中つ国（日本の古名）はすべて我が子孫の治めるべき国であるとして、オオクニヌシに圧力をかけて「国譲り」を迫ったのである。オオクニヌシは勿論抵抗したものの遂に観念し、「長（とこしへ）に隠れた。」つまり自死したのである。

かくしてオオクニヌシは霊界専門の神となり、出雲大社に祀られた（閉じ込められ

た）。人間の運命や縁を支配しているのは幽界であるから、多少ブラックユーモアであるが、今でもオオクニヌシは縁結びの神なのである。ヤマト政権にとって、オオクニヌシの祟（たたり）は何よりも恐ろしかった。そこで天皇の宮殿よりも大きい、出雲大社が建てられたのである。<sup>5.2-12)</sup>

井沢元彦（作家）のユニークな「怨霊史観」のさわりは、以上の通りである。井沢には、既存の歴史学界の反撃に対する警戒心が強いようであるが、井沢説も本人が思っているほど異端的でもない。たとえば加藤義成（国文学者）なども、当時の怨霊思想の比重の大きさを語っている。<sup>5.2-13)</sup>

角川源義（角川書店社主）も主張しているように、大国主命の名は特定個人名ではないであろう。出雲神社や大穴持神社は、全国的に存在している。つまりは、天つ神を奉ずるヤマト政権に、各地の国つ神が次々に屈伏して行ったプロセスを示しているであろう。天つ神の背景には稲作や鉄器といった先進技術に富んだ弥生文化が考えられるし、国つ神の背景には土着の縄紋文化が二重写しになっているかもしれない。

### 5.2.4 倭国大乱

縄紋時代は平和の時代、弥生時代は戦乱の時代という論は、近年佐原真（国立歴史民俗博物館長）はじめ多くの研究者が説いている。<sup>5.2-14)</sup> 世界中至るところで、戦争は文明と共に始まったとされる。農耕は蓄えを生

5.2-11) 〔上田正昭・益田勝美、1993〕: 269.

5.2-12) 井沢元彦 1998、『逆説の日本史 ① 古代黎明編』小学館文庫: 234 他.

5.2-13) 角川源義・加藤義成 1983,「古代出雲王国」角川書店編『古代王国の謎』(日本史探訪 2)角川文庫: 268.

5.2-14) 佐原 真 1993,『考古学千夜一夜』小学館: 28ff ほか.

じ、貧富の差、身分の差、組織運営が生まれ、集団間の争いが激化するという見方である。

弥生時代の集落の遺跡が近年続々と発見され、話題を呼んでいる。その中には、大規模な吉野ヶ里遺跡なども含まれる。その多くは防衛の為の環濠が周囲をめぐっており、又一部には居住には不便な高地性集落が発見されたりしている。時代的には異なるうが、アイヌのチャシ(砦)や琉球のグスク(城)にも類似した性格を見る事ができよう。<sup>5.2-15)</sup> 防衛施設や砦や城の配置は、戦術思想だけでは決定できない。即ち日本古代史の中で、武器の選択と並んで戦略的思想が明らかに表われている事を、我々は学ぶ事ができるのである。

『後漢書』に「桓霊の間、倭国大いに乱れ、たがいに攻伐すること歴年」と表現されている桓帝・霊帝の在位は、AD 146～189年である。この記事に続いて、この大乱を收拾する為に、女王卑弥呼(ひみこ)が共立された事が記されているのである。<sup>5.2-16)</sup>

松木武彦(岡山大学助教授)は、AD 3世紀前半には北九州・瀬戸内・近畿を結ぶ経済ブロック＝首長連合が成立したであろうと報告している。<sup>5.2-17)</sup> これこそ、現代用語でいう戦略提携(strategic alliance)そのものではなかろうか。この首長連合の宗教的代表者が、卑弥呼なのであった。

### 5.2.5 継体戦争

「継体戦争」というネーミングは、普通の日本歴史の教科書には見当たらないはずである。このネーミングは、黒岩重吾(作家)が、継体が前王朝を引っくり返してみずから天皇になるまでの戦争状態をこう呼んだものであり、彼の著書の見出しに、「日本最初の大戦争」と書いてある。本稿筆者は、これにいわゆる「磐井の反乱」まで含めて、継体の戦争とする事に賛成である。継体は、すぐれて戦略家である。でなければ、新王朝を樹立し、国際問題もからんでいる大規模内戦を收拾する事などできなかったであろう。<sup>5.2-18)</sup>

そもそも継体という呼び名は、奈良時代(8世紀)になって、神武などと共につけられた漢風諡号(しごう)である。体とは王朝を表わしているので、「体を継ぐ」とは、王朝の交代を暗示していよう。元々は越(こし)の国すなわち裏日本の支配者だったので、朝鮮半島との交易を通じて、財力も武力も豊かであったろう。

日本書紀が記すところによれば、継体は507年に河内の樟葉(くすは;現在の枚方市)で即位した後に、526年に大和の磐余(いわれ)に遷都した事になっている。いいかえれば、即位後の20年間も大和に入れなかったという事なのだ。それほど長い間、反対勢力との間に闘いが続いたという事になるう。

5.2-15) 松木武彦 1998,「戦争の始まりと王権の形成」都出比呂志・田中琢(編)『権力と国家と戦争』(古代史の論点 4)小学館:235ff.

5.2-16) 田中 琢 1991,『倭人争乱』(日本の歴史 )集英社:75.

5.2-17) [松木武彦,1998]:230ff.

5.2-18) [黒岩重吾,1991]:51.



いわゆる「磐井の反乱」にしても、国定教科書的な天皇の威光に逆う西国の悪人豪族と理解する従来学説に対して、磐井は北部九州の諸豪族を組織化し、ヤマト王権の国家併合の野望の前に立ちふさがったのだという見解も出るようになった。<sup>5.2-19)</sup>

森浩一(同志社大学教授)も、新羅と結んだ独自政権の筑紫勢力と、新羅に任那を奪われたのを取り戻そうと大軍を派遣したヤマト王権の対立と見る。<sup>5.2-20)</sup>

もっと面白いのは、ユニークな古代史学者として著名な某氏であって、従来から対朝鮮政策を主導して来た磐井に対する、新参者の「継体の反乱」なのだという断定である。ともあれ、このいわゆる磐井の反乱は、1年末にわたる苦戦の末に、継体の勝利となって終わった。

### 5.2.6 武器と戦術

縄紋時代において使用された武器は、本来は狩猟用として使用されるべき石鏃、石槍、石斧、石剣などが、たまたま動物に対してでなく人間に対して使用され場合を指していよう。ところが弥生時代になると、青銅や鉄などの金属が使われるようになり、武器の効率という点から見ると、飛躍的に向上したといえる。

従来の、俗的な意味での「常識」として、狩猟民は残虐で好戦的、農民は平和的と思われやすいのであるが、現実はどうも全く逆であるという。<sup>5.2-21)</sup> その上縄紋集団は小

規模、弥生集団の方は大規模化、組織化の度を加えているという。稲作が共同作業、組織編成を生み、さらに身分階級を生んで行ったとされる。

日本列島における現住民としての縄紋人と、移入人としての弥生人との対立は、次第に弥生人の優位となって解消の方向に向かったのであるが、その後も倭人同士の争乱は引き続いており、やがてヤマト政権による国土統一が行われるのである。

ヤマト大王権は朝鮮半島では任那(みまな)を確保し、百濟(くだら)と友好し高句麗(こうくり)と対立した。特に5世紀の応神王朝が前代よりも更に激しい「戦いの時代」であった事は、発掘された古墳の副葬品などによっても証明される。<sup>5.2-22)</sup>

応神王朝に対応するいわゆる中期古墳となると、それ以前の前期古墳に比べて埴輪(はにわ)においても副葬品においても著しく異なった。前期の鏡や玉類への執着は一挙に薄れ、鉄製の甲や冑が急増する。甲もはじめは剣道具のような短甲だったものが、やがて騎馬戦向きの挂甲(多数の小札をとじ合わせて伸縮性のあるもの)が出現する。

軍馬はかなりの貴重品だったらしく、馬の甲や鉄製の面も出土する。歩兵戦から騎馬戦への変化は、武器の面では短剣から長剣へ、さらに長刀へ、ホコはますます鋭くなる。弓矢についても甲をも通れる強い弓となり細長い鏃が大量に出土する。

この武器の変化と騎馬戦への戦術方式転

5.2-19) 鬼頭清明 1975,「日本民族の形成と国際的契機」『大系 日本国家史 1』東京大学出版会。

5.2-20) 森 浩一 1993,「継体天皇とその真陵をめぐって」文芸春秋(編)『日本の歴史 上』文芸春秋社。

5.2-21) 佐原 真 1992,『日本人の誕生』(大系日本の歴史 1)小学館など。

5.2-22) [井上光貞, 1973]: 394。

換はトータルとして戦略転換というべきである。そのインパクトは、江上波夫(東京大学名誉教授)にヒントを与え、彼は1948年にはじめて、北方騎馬民族がわが国に渡来し倭人を征服したと説いたのである。<sup>5.2-23)</sup>彼の「騎馬民族征服説」そのものは、今日ではもはや古代史上の通説とはいえない難いものの、この説の持った力は、筆者にいわせれば戦略論の力であったという事になるのである。

### 5.3 古代史のストラテジスト達

#### 5.3.1 聖徳太子

日本歴史上の著名な人物の中で、戦前から戦後の今日に至るまで高い評価を与えられ続けているという人は、まことに少数であろう。そういう珍しい人達の代表者に当たるのが、恐らくは聖徳太子(574~622)である。何しろ最近まで、1万円札といったら聖徳太子だったのだ。

聖徳太子といえ、今日において「日本的」と呼ばれるいろいろな事物や日本人的特性を、歴史的に決定づけた人といっても過言ではなからう。とすれば、戦略思想の面から聖徳太子を分析すれば、日本民族の戦略思想に関して、大きなヒントを得る事ができるのではないだろうか。

#### (1) 厩戸皇子の実像

「聖徳太子」の名は、太子の死後に贈られた諡号(しごう)である。本名といえるのは厩戸皇子(うまやどのみこ)であり、その居宮の名から上宮太子(じょうぐうたいし)などという別名でも呼ばれた。その出自は用

明天皇を父に、穴穂部間人皇女(あなほべのはしひとひめ)を母にした皇族であり、19歳で摂政になり、その後斑鳩(いかるが)に宮を移し、画期的な新政策を次々に打ち出した。

その主なものは、遣隋使の派遣、冠位十二階の制定、憲法十七条の制定、『三経義疏(さんぎょうぎしょ)』の執筆、法隆寺の創建等々である。これらの諸政策や事蹟の実現の裏には、太子が蘇我氏をバックとしていた事、即ち父方の祖母、母方の祖母が共に蘇我稲目の娘だったという事も無視できない。

ところがこのように高貴で傑出した太子の実像を探って行くと、どうもあまり明快でなくなるのは不思議である。たとえば厩戸という名にしても、母が厩の前を通りかかって無痛分娩したという、まるでイエス・キリストと同じではないか。太子の実像を実証すべき『日本書紀』の記述にしても、いろいろと疑問は多い。近年まで1万円札の肖像になっていた「唐本御歌(とうほんみえい)」にしても、太子とは別人とする説の方が今や有力なのである。例えば、両手に笏を捧げているのは官僚(臣下)なのであって、皇族ではない、などである。<sup>5.3-01)</sup>

聖徳太子は後世になるに従ってますます実像から離れて、信仰の対象にもなっていった。彼は日本における仏教の教主であり、外交面では「日出づる国」としてのわが国の威信を対隋外交に発揮した人である。他方では子孫が一族滅亡して血統が絶えた悲劇の人、救世(くせ)観音の再来として拝

5.2-23) 江上波夫・佐原真 1990、『騎馬民族は来た!? 来ない?!』小学館など参照。  
5.3-01) 梅原猛・横超慧日 1984、『聖徳太子(二)』『日本史探訪 3』角川書店など。

される存在にまでなってしまったのである。

今や聖徳太子の虚像から、玉ねぎの皮をむくような作業が必要となった。研究者達の努力の中から、太子複数説や、渡来人説<sup>5.3-02)</sup>、太子非実在説<sup>5.3-03)</sup>まで生まれている。ともあれ戦略論としての検討の見地からは、一まず聖徳太子を、実質的に古代日本国家の進路を対内・外にわたって指導した、統一人格として検討して行く事としたい。

## (2) 国内政治家として

聖徳太子の国内的功績として必ず挙げられるのは、冠位十二階と十七条憲法であろう。国政戦略上、十七条憲法は国家理念の表明であり、冠位十二階は国家組織の制度化だからである。

まず冠位十二階については、推古11年(603年)に制定され、官人の組織上の序列が明確化されたものである。わが国における官僚制のはじめとしての意義は大きい。しかし聖徳太子の関与がどれほど大きかったかは疑問であるとする研究者もある。ここでは直木孝次郎(大阪市立大学名誉教授)の見解や大山誠一(中部大学教授)の見解を参照し、太子が蘇我馬子と協力し、百濟系渡来人らを参加させて制度化したと考えておきたい。<sup>5.3-04)</sup>

冠位十二階の組織戦略的意義は、従来血縁による姓(かばね)に従って因習的に階層身分が扱われていたものを改革し、能力ある者を登用して姓に代えて位を与えるとい

う、近代用語を使えば実力主義の新理念に立った制度なのであった。これにより、以前の氏族連合体が、はじめてヤマト政権らしい統一体制を備えるに至ったのであって、太子が蘇我氏と共に広い視野で大陸の先進国から移入した国家体制を応用した事が高く評価される。

次に十七条憲法については、日本書紀に記事があり、推古12年(604年)に「皇太子親(みづか)ら筆(はじめ)てこれを作る」となっている。しかし有名な津田左右吉(東京帝国大学教授)の戦前から引き続く批判をはじめとして、<sup>5.3-05)</sup> 否定説も根強くある。筆者は、太子の執筆の有無を歴史学的に論証する立場にはない。それがたとえ太子の単独執筆でなく、蘇我馬子との連合勢力の所産であっても、少しも差し支えはないと考えている。

十七条憲法の第1条は、「一日以和貴無忤宗為(一にいはいく、やはらぎをもつたふとしとなし、さからふことなきをむねとなす)」となっている。これなどは、あまりにも「日本的」な規定として知られている。企業経営者達の中でも、バブル経済解消後久しい現在においても、「人の和」を社是として得々としている例が後を絶たない。筆者自身はこの第1条について、少し違った感想を持っている。太子の「和」の強調は、当時の血を血で洗う氏族間の権力闘争の渦中であつての絶望または悲鳴と聞こえるのではないだろうか。

とすれば反動的に、「和」さえ保たれるな

5.3-02) 小林恵子 1993、『聖徳太子の正体』文春文庫。

5.3-03) 大山誠一 1999、「聖徳太子の誕生」(歴史文化ライブラリー 65)吉川弘文館。

5.3-04) 直木孝次郎 1973、『古代国家の成立』(日本の歴史 2)中公文庫など。

5.3-05) 津田左右吉 1950、『日本古典の研究』岩波書店など。

らば何でも良いとする和の自己目的化がおこなわれた可能性すらあるのである。ちなみに在野の研究者でもある井沢元彦(作家)によれば、十七条憲法の基本精神は、よくいわれているような仏教精神の鼓吹ではなく、あくまでも「和」すなわち「話し合い至上主義」を第1条に置いたところにあるとしており、さすがに鋭い。<sup>5.3-06)</sup>

第2条は仏教を国教化するという過激思想の表明であり、第3条は「詔(みこと)のり」をうけたまわりては必ずつつしめ、君は天なり。臣は地なり」となっているのであるが、要は「話し合い決定主義」は、仏の教えよりも、天皇への忠誠よりも大事だという事なのである。筆者はこの井沢の指摘こそ本質的であると思う。本稿の趣旨から見れば、戦略家としての聖徳太子が日本歴史学の霧の中から、その正体を現わした事になるのである。

特定企業の中とか、特定団体の中の和が保たれるのであれば、不良資産隠しでも談合でも、何でもありになってしまう昨今の日本人の行動様式は、事によると古えの聖徳太子の呪いによるのかもしれないのではないか。

### (3) 太子の国際戦略

二日篤敬三宝三宝者仏法僧也(二にいはいはく、あつく三ぼうをうやまへ。三ぼうとは、ほとけ、のり、そうなり、)。

十七条憲法の第2条は、上記の通りである。わが国への仏教の導入は、太子の国際感覚によるところ大であろう。仏教を国教

化するという事は、太子が熱心な仏教徒であったか否かは別としても、物部氏など保守派との激しい抗争を乗り越える難事であった。仏教による国内統一をもって、国際的生き残りをはかる戦略目標とするポリシーの前に、物部氏ら守旧派は時代に乗遅れて行ったのである。

特に対隋外交の強硬路線は、太子主導と見てよい。607年には小野妹子を使者として、「日出づる処の天子。書日没する処の天子に致す。恙無きや」の国書を提した。当時の超大国を相手に対等外交を試みたのは、現在の我が国の対来外交姿勢の弱さなどと比べても、太子の戦略の骨太さを示すものであろう。

#### 5.3.2 藤原不比等

藤原不比等(659~720)は中臣鎌足の次男であるが、兄が早く出家した為に跡とりとなり、以降栄華をほこる藤原一門の事実上の門祖となった人物である。大納言となり右大臣となり、持統・文武両帝とこれに続く元明・元正両女帝の御代を通じて、典型的な律令政治家として、国政を指揮した。その上聖武・孝謙両帝の外戚として、政治家の生涯を貫いた。

ただ上田正昭(京都大学名誉教授)などは、不比等はただ政略の人だっただけでなく、実は政策の人であったとし、その農政や外交や宗教政策等における力量を、高く評価している。<sup>5.3-07)</sup> 史料も乏しい古代の人の事ではあるが、11歳で偉大な父鎌足を失った後、渡来系氏族に教育されて国際感覚を養

5.3-06) 井沢元彦 1998、『逆説の日本史 ① 古代黎明編』小学館文庫：114ff.

5.3-07) 上田正昭 1986、『藤原不比等』朝日新聞社。

い、ある意味で父を超える人物となった。内政面では大宝律令や養老律令の支えとなり、外交面では遣唐使や遣新羅使に見るように、東アジア外交をリードしている。

またあの謹直な古代史学者・青木和夫(お茶の水女子大学名誉教授)までが、次のように書いているほどである。

「元明・元正両朝のころの一般貴族は、朝廷内部の権力をめぐるうわさ話などを気にするよりも、自信と誇りを持って自己の職責をつくしたようにみえる。維新を経験した明治時代の人々にそれがあったように……」<sup>5.3-08)</sup>

筆者には、明治時代といわずわが国の古代に、このような人々がいた事は、大きな驚きである。

## 5.4 中世史のストラテジスト達

### 5.4.1 平 清盛

「驕る平家は久しからず」として、戦前の国定教科書の見解では、平家一族とその代表者平清盛は悪役扱いであった。しかし「旧来の王朝国家の中で、貴族として権力を手中にして行った」清盛の思考と行動は、現代の我々の目から見て1人のストラテジストとして検討に値しよう(五味文彦東京大学教授)<sup>5.4-01)</sup>

清盛を代表とする平家一族は大輪田泊(神戸港)を改修し、(福原遷都もあるが)日宋貿易を積極化しているし、また清盛自身の政治センスについても「ソフィスティケイテッド・ステーツマン」(扇谷正造)という

最上級の賛辞が与えられているほどである。<sup>5.4-02)</sup> それにも拘らず、平家は急速に滅亡した。その原因については、井沢元彦(作家)は平家が現体制追隨で新時代へのグラウンドデザインを欠いた点に求めており、明快である。<sup>5.4-03)</sup>

結局清盛をはじめとする平氏一門には、ある程度の視野の広さや国際感覚はあったものの、ストラテジック・マインドは乏しかったといえよう。それに反し、後発の鎌倉幕府は、重農主義で鎖国主義という非開明政権だったにも拘らず、平家よりも長く100年以上も続いている。思いの外に戦略性を持ち合せていたといえよう。この点は、次項で検討されなければならない。

### 5.4.2 源 頼朝

戦略論的見地から源頼朝を評価すれば、当時の武士階級の興隆気運という環境条件を十二分に生かしている。そして従来京都に一元的に握られ続けて来た政権を、東国の鎌倉に引きつけてしまうという大転換を実現した。実力を背景とした外交戦略家としても、出色の存在である。前述した平清盛はその個人的見識の広さ高さにも拘らず、ストラテジストの実績という点では、頼朝の足もとにも及ばないという事になってしまうのである。

そうはいつでも、何しろ今から遠い過去の12世紀の事であるから、的確な論証はそう容易ではない。例えば鎌倉政権はいつ成立したか? という一事をとっても、諸説

5.3-08) 青木和夫 1973, 『奈良の都』(日本の歴史 ③)中公文庫:119.

5.4-01) 五味文彦 1992, 『鎌倉と京』(大系日本の歴史 )小学館:76.

5.4-02) 角川書店(編)1984, 『源平の争乱』(日本史探訪 6)角川文庫:20.

5.4-03) 井沢元彦 1999, 『逆説の日本史 ④ 中世鳴動編』小学館文庫:413.

が分かれるのである。そのうち最も早いとする説は、治承4年(1180)に南関東に軍事政権が成立していたとするものである。逆に最も遅いとするのは、社会科的定説ともいえる、建久3年(1192)に頼朝が征夷大將軍に任ぜられた時とする説である。

諸説の中で本稿筆者が最も注目したいのは、寿永2年(1183)の「十月宣旨」の獲得である。それは形式上では朝廷によって、東海・東山・北陸の荘園を本の如く領知すべしという宣言であり、誠に平凡である。ただし「これに従わぬ者は頼朝が追討する」というのが今回のミソである。<sup>5.4-04)</sup> 頼朝はもはや朝敵ではなくなり、これまで手をつけられなかった東海・東山・北陸の実質支配権を、労せずして手中にしてしまったのである。後白河法皇というクセ者を相手にして、頼朝は鎌倉に座したままで外交的勝利をおさめた。これをストラテジストといわずして、何といおうか。

### 5.4.3 源 義経

源義経は、世間の人気という点では、常に兄の頼朝にまさっているだろう。「ひよどり越えの逆落とし」の奇策で名を挙げ、平家追討の実戦部隊長をつとめた義経は、新戦術の企画者および実践者としてほとんど比類がない。騎馬集団の運用と奇襲を成功に導いたところなど、司馬遼太郎(作家)をして軍事的天才と呼ばせたほどである。<sup>5.4-05)</sup> 筆者としても、この点は異論をとなえられない。

ところが義経は、石井進(国立歴史民俗博物館長)も指摘するように、<sup>5.4-06)</sup> 京都駐在司令官として政治に関係しはじめると、兄頼朝が予めその申請によってのみ行賞をしてほしいと朝廷に要請していたにも拘らず、すっかり法皇側のとりこにされ、昇殿を許されて有頂天になり、検非違使の官職を受けてしまったのである。司馬の皮肉っぽい表現によれば、「スターになったがために、性格がこわれてしまった」義経であった。<sup>5.4-07)</sup>

この政略音痴には、どうにもならないものがあつた。こんな弟を許したりしたら、関東政権における頼朝の地位そのものが危いのである。いかに判官びいきの世の中であっても、戦略家としての頼朝は、いかに陰気で冷酷に見えても高く評価されねばならず、軍事戦術の天才であつた義経は、戦略史上はその存在を認められる事があつてはならないのである。

### 5.4.4 楠木正成

#### (1) 正成の独自性

戦前から戦中にかけて大楠公(だいなんこう)と称せられた、日本史上最大の「忠臣」楠木正成は、戦後はうって変って全く顧られない。例の司馬遼太郎が楠木正成に貼りつけたいくつものレッテルは、「あの時代(南北朝)に、天皇に忠義を尽くした武士はあの人唯一人」「日本最初のイデオロギスト」「日本のロビンフッド」などであり、仲々に面白い。<sup>5.4-08)</sup> 以下、これらについて

5.4-04) [五味文彦, 1992].

5.4-05) 司馬遼太郎他 1984, 「源義経」『源平の争乱』(日本史探訪 6)角川文庫: 146.

5.4-06) 石井 進 1974, 『鎌倉幕府』(日本の歴史 7)中公文庫: 158ff.

5.4-07) [司馬遼太郎他, 1984]: 168.

5.4-08) 司馬遼太郎 1984, 「楠木正成」『南北朝と室町時代』(日本史探訪 8)角川文庫: 7, 13, 15.

意識してみたい。

正成の出自は詳かではないが、中央の由緒正しい武士階級の出ではなく、河内の田舎の武力を持った流通業者からの成り上りというところであろう。天皇に忠義をつくしたというが、後醍醐天皇と正成では身分上は天地の差があって、本来ならお互いに接触する機会などないはずであった。これが乱世の面白いところかもしれない。

正成は今から分析すると、思想性の高い教養人であり、南朝こそ日本の正統だというイデオロギーに従って行動した。こういう類の人物は、この時代には他にほとんど見当たらない。むしろ本来の武士でなかった為に、かえって純な忠義に殉じる事ができたのであろう。筆者はここで、農民出身の近藤勇や土方歳三らが、幕末期の旗本達よりもはるかに武士らしくたのと似ていると思う。その思想性と実行力の骨太さにおいて、正成は間違いなく戦略の人であった。

## （2） 行動は思想の表現

正成の戦略性が「見える」ところは、まずもって皇統の正当性への思想である。つまりは離合集散の行動ではなく、理念に従う行動を選んだという事である。その証拠に、彼は南朝の正統性という思想に従い、最後は敗れ戦を承知で逃げもせず激しく戦い、自刃した。つまりは、後世に自分の思想を残そうとしたのであろう。

次に彼の戦略性は、彼の戦いが徹底したゲリラ戦に終始したところに「見える」。もともと兵力に大差があり、直接アプローチの戦略を採用できないのである。結局正成が採用した戦術は、ビジネス的合理性を徹

底したものとなった。千早の小城にわずか1千人が立てこもり、関東の大軍を3ヵ月にわたって悩ました武器は、正規戦の弓矢よりも、煮え湯や汚物や丸太や石などであった。全くのベンチャー・ビジネスだった。

このようにして正成は、天下の形勢をいらんでこれをひっくり返し、一時期とはいいながら建武の中興にまで持ち込んでしまうのである。海津一朗（和歌山大学助教授）のように、「忠臣」などという枠を超えて自己の人生戦略を生き抜いた、魅力ある「悪党」として評価する見方も成立するであろう。<sup>5.4-09)</sup>

## 第6章 日本の戦略思想史 その2（近世）

近世革命の時代とタイトルし、織田・豊臣・徳川の各時代における戦略思想を研究する。

## 第7章 日本の戦略思想史 その3（近代）

近代日本の戦略思想を対象とする。時代的には幕末から明治にかけての期間について研究する。

## 第8章 日本の戦略思想史 その4（現代）

現代日本の戦略思想、特に大東亜戦争に関わる戦略思想に関して、詳細研究する予定である。

5.4-09) 海津一朗 1999、『楠木正成と悪党』ちくま新書。

**第9章 東洋の戦略思想史**

古代の孫子から現代の毛沢東に至るまでの、中国における戦略思想の変遷を柱として、詳細研究する予定である。

**第10章 ストラテジー学の成立****10.1 戦略哲学試論**

すでに情報哲学、科学哲学、構造主義哲学の各側面からストラテジー学の理論的基礎づくりを試みた。<sup>10-1)</sup> 今後は、複雑性の哲学等の側面からの研究を追加していきたい。

**10.2 戦略学の一般法則 (未完)****10.3 戦略の適用分野 (未完)****第11章 人間と戦略 (未着手)****第12章 経営と戦略 (未着手)****第13章 国家と戦略 (未着手)****第14章 ストラテジー学の課題 (未着手)****参考文献**

- 青木和夫 1973, 『奈良の都』(日本の歴史 3) 中公文庫。  
 石井 進 1973, 『鎌倉幕府』(日本の歴史 7) 中公文庫。  
 井沢元彦 1998, 『逆説の日本史 ①～④』小学館文庫。  
 伊藤憲一 1985, 『国家と戦略』中央公論社。  
 井上光貞 1973, 『神話から歴史へ』(本日の歴史 1) 中公文庫。  
 上田正昭 1986, 『藤原不比等』朝日新聞社。  
 江上波夫・佐原真 1990, 『騎馬民族は来た!? 来ない?!』小学館。  
 大山誠一 1999, 『聖徳太子の誕生』(歴史文化ライブラリー 65) 吉川弘文館。  
 海津一郎 1999, 『楠木正成と悪党』ちくま新書。  
 学 研 1997, 『聖徳太子の本』(ブックス・エソテリカ 20) 学研。  
 笠原英彦 1998, 『天皇と官僚』PHP 研究所。  
 角川書店(編)1983, 『日本史探訪 1～6』角川文庫。  
 鬼頭清明 1975, 『大系日本国家史 1』東京大学出版会。  
 黒岩重吾 1991, 『古代史への旅』講談社文庫。  
 小林恵子 1993, 『聖徳太子の正体』文春文庫。  
 五味文彦 1992, 『鎌倉と京』(大系日本の歴史 ) 小学館。  
 佐原 真 1992, 『日本人の誕生』(大系日本の歴史 ) 小学館。  
 佐原 真 1993, 『考古学千夜一夜』小学館。  
 司馬遼太郎 1999, 『司馬遼太郎の日本史探訪』角川文庫。  
 清水龍雄 1995, 『戦略経営』学文社。  
 田岡俊次 1994, 『戦略の条件』悠飛社。  
 高倉洋彰 1991, 『弥生』(グラフィティ日本謎事典 ) 光文社文庫。

10-01) 清水龍雄 1999, 『戦略学序説』『豊橋創造大学紀要』第3号: 84-99。



- 田中 琢 1991,『倭人争乱』(日本の歴史 ) 集英社 .  
田中琢・金関恕 1998,『都市と工業と流通』(古代史の論点 3) 小学館 .  
谷沢永一 1992,『先見力の達人』学研 .  
津田左右吉 1950,『日本古典の研究』岩波書店 .  
都出比呂志・田中琢(編)1998,『権力と国家と戦争』(古代史の論点 4) 小学館 .  
直木孝次郎 1973,『古代国家の成立』(日本の歴史 2) 中公文庫 .  
西山 清 1998,『聖書神話の解説』中公新書 .  
福井勝義・春成秀爾(編)1999『戦いの進化と国家の生成』(人類にとって戦いとは 1) 東洋書林 .  
古川純・山内敏弘 1993,『戦争と平和』(人間の歴史を考える ) 岩波書店 .  
文芸春秋(編)1993,『日本の歴史 上』文芸春秋社 .  
町田 章 1986,『集落と祭祀』(岩波講座日本考古学 4) 岩波書店 .  
黛 弘道(監)1997,『古代史の謎』実業之日本社 .  
森 浩一 1999,『日本神話の考古学』(朝日文庫)朝日新聞社 .  
安本美典 1988,『新版 卑弥呼の謎』講談社現代新書 .  
吉村武彦 1992『古代王権の展開』(日本の歴史 ) 集英社 .  
鷲田小彌太 1999,『日本人のための歴史を考える技術』PHP 研究所 .